

# 波照間島の祖先祭祀と農耕儀礼

## —ムシャーマ行事を中心とする盆行事の考察—

上野 和男

- 一、問題
- 二、波照間島の年中行事の構造
- 三、ムシャーマ行事の儀礼過程

- 四、家族単位の盆行事の儀礼過程
- 五、考察

### 論文要旨

この報告は、沖繩八重山波照間島の盆行事についての記述と分析である。波照間島の盆行事はムシャーマを中心とする村落レベルの行事と家族単位の盆行事の二つに区分される。ムシャーマは来訪神ミルクを先頭とする仮装行列と棒術、太鼓、獅子舞、ニンブチャー（念仏踊り）を内容とする行事であり、村落レベルでの盆行事にはこのほかに来訪神アングアの行事とイタシキバラとよばれる行事がある。これに対して家族単位の盆行事は、先祖を迎えて供物を供えて供養し、そして先祖を送るといふ、構造的にはごく一般的な内容の盆行事である。本稿では波照間島の盆行事をつぎの三点を中心に考察を試みた。第一は、村落レベルの行事と家族単位の盆行事の儀礼過程の記述と両者の意味の差異、および両者の関係についての検討である。第二は、ムシャーマ行事のもつ祖先祭祀的性格と農耕儀礼、特に豊年祭的性格についての考察である。そして第三は、盆行事に登場するミルク、フサマラー、アングアの三つの来訪神についての検討である。

これらの諸問題について分析の結果、つぎのような結論に達した。第一に、波照間島の盆行事のうち、村落レベルの行事は主として無縁の先祖に対する供養がその中心であり、家族レベルの盆行事は各家族の正当な先祖に対する祖先祭祀であって、両者は意味が異なる。第二に、村落レベルの盆行事は、豊年祭的要素と祖先祭祀的要素の双方を含んでおり、これはもともと無縁先祖に対する祭祀として行われていたムシャーマ行事に豊年祭アミジワの行事が移行し両者が合体した結果である。第三に、八重山地域で活発に行われている来訪神信仰のなかでも波照間島のミルク、フサマラー、アングアは、たとえばミルクがブーブザーとよばれる夫やミルクンタマとよばれる子供たちとセットになって登場するなど、いくつかの独自の特徴をもつことが明らかになった。

一、問題

この報告は、沖縄県八重山群島の波照間島で、旧盆におこなわれる島最大の年中行事であるムシャーマ行事の記述と分析である<sup>1)</sup>。周知のように波照間島は、馬淵東一(一九六五)を出発点とする奄美・沖縄の社会組織分析の基本モデルのひとつとなった社会であるが、社会組織、とりわけ神行事や御嶽への帰属方式などの分析は別稿にゆずるとして、ここでは現在、祖先祭祀と農耕儀礼の二つの要素を含みながら行われているムシャーマ行事に焦点をあてて、以下の諸問題について検討してみたいと思う。

第一は、ムシャーマ行事と家族単位の祖先祭祀の儀礼過程の分析である。ムシャーマはソーリン・ムシャーマともいわれるように、現在は波照間島のソーリン(盆行事)のひとつである。ムシャーマは旧盆の中日、すなわち旧暦七月一三日のシキルピン(先祖迎え)と七月一五日のウグリピン(先祖送り)の間の七月一四日のナカヌピン(中の日)に島をあげて行われる。したがって、ムシャーマは各家族単位に行われる盆の祖先祭祀行事と平行して行われる。ムシャーマ行事と各家族単位の盆行事がどのように組み合いながら行われているかを、一九八四年のムシャーマを中心に分分析するのがここでの問題である。ムシャーマについては、これまで住谷一彦(一九七七)の観察記録や、仲底善祥(一九七九)の分析、および波照間民俗芸能保存会(一九八二)の一九八一年を中心とするの記述がある。ここではこれらの観察記録をも参考にしながら儀礼過程の分析を試みたいと思う。

第二は、ムシャーマ行事の性格についてである。現在のムシャーマ行事の主要部分を占める行列は、かつてアミジワー(豊年祭)で行われていた行列が、おそらく一八世紀後半に、ソーリンのムシャーマ行事に移動したものであるとされている(波照間民俗芸能保存会一九八二)。したがって、現在のムシャーマ行事は豊年祭の性格と祖先祭祀の性格をあわせもつ行事となっている。こうしたムシャーマ行事の性格について、現在の儀礼をとおして検討してみたいと思う。

第三は、ムシャーマを中心とする盆行事に登場する来訪神の問題である。八重山地域では来訪神信仰、とくに仮面仮装来訪神の信仰が顕著に認められる。ムシャーマを中心とする盆行事には、現在、ミルク、フサマラー、アングマとよばれるそれぞれ性格のことなる三つの仮面仮装来訪神が登場し、来訪神にかかわる行事としてもムシャーマは注目すべき行事のひとつである。来訪神の概念規定にはさまざまな見解があるが、ここでは可視的に確認しうる三つの仮面仮装来訪神について、その性格、儀礼、担い手などについて考察してみたいと思う。ミルクは八重山各地の豊年祭や節祭に布袋の面を被って登場する来訪神であって、波照間島のミルクは結婚した女性とイメージされ、夫とされるブーブザーやその子供とされるミルクンタマも登場する。また、フサマラーはかつて雨乞いの行事に登場する雨をもたらす来訪神であったが、現在ではムシャーマ行事の行列のなかに登場する。さらに、アングマは祖先神とされる来訪神であるが、これは盆行事に登場する来訪神である。波照間島では、これらの来訪神がムシャーマや盆行事に集中して登場し、他の年中行事

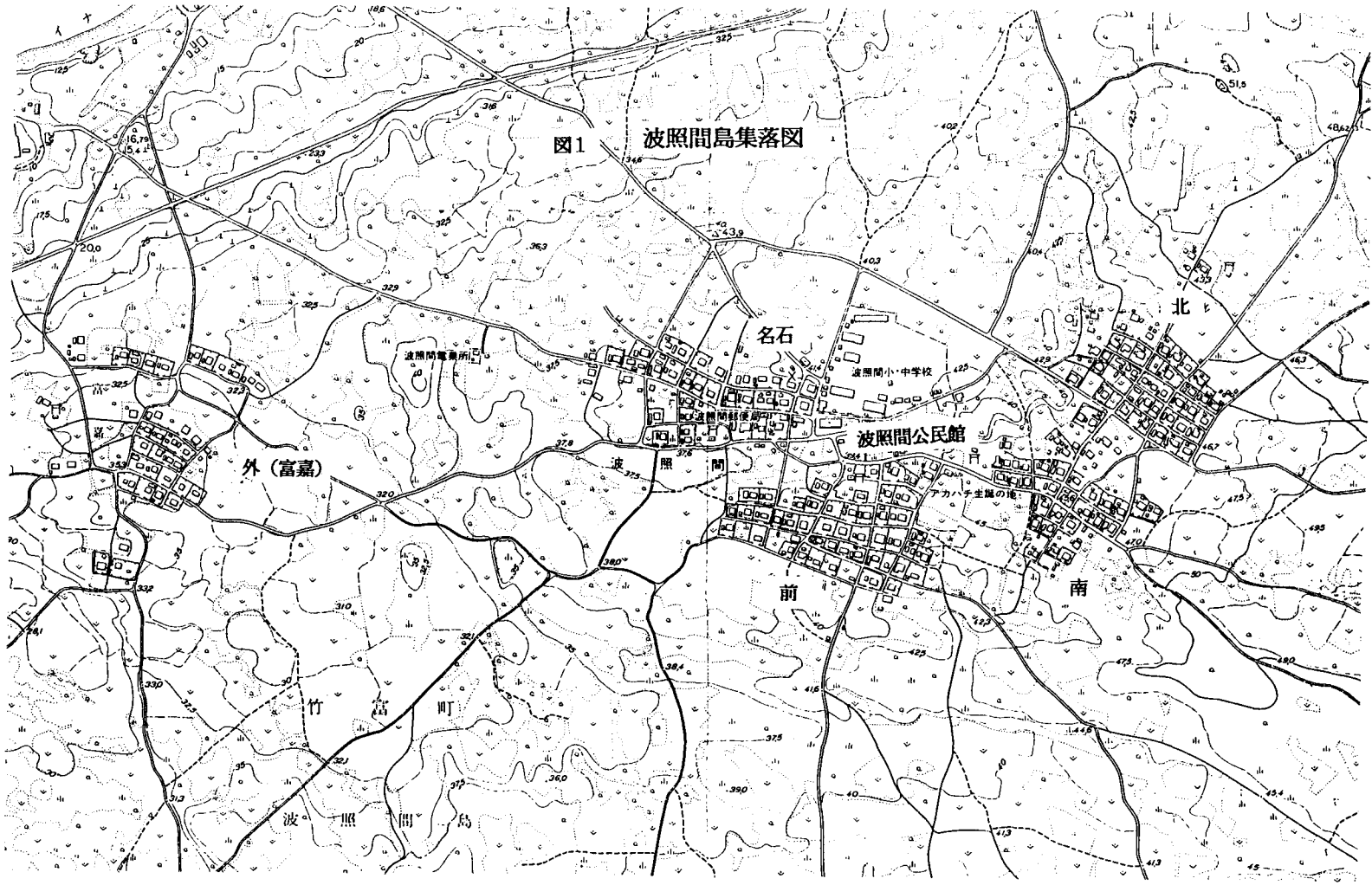


表1 波照間島年中行事一覧 (1980~1981年)

新 暦	旧 暦	干支	行 事
1980/09/17	1980/08/09	癸巳	* シッシン (節祭) (4日間)
21	12	酉申	ピンガン (彼岸)
23	15	己亥	スグヤ (十五夜)
29	21	乙巳	* カナムヌソージ
30	22	丙午	* ヌブリ
10/21	9/13	丁卯	* ミワクチェ
22	14	戊辰	* カンバナ
27	19	癸酉	* アラタービ
11/01	24	戊寅	* シマフサラ
06	29	癸未	* アミニゲー (アサニゲー) 3日間
07	30	甲申	* ウシンバンユレ
08	10/01	乙酉	* ナータビ
21	14	戊戌	* アミニゲー (アサニゲー)
24	17	辛丑	* アミニゲー (スーニゲー)
12/05	28	壬子	* ナータビ
14	11/08	辛酉	* ミイガクムリ
22	16	己巳	* ミニンバン
31	25	戊寅	* プータビ
1981/01/01	26	己卯	シヨングチ (新正)
04	29	壬午	* トシヌヌブリ
02/01	12/27	庚戌	* カナムヌソージ
02	28	辛亥	* ヌブリ
03	29	壬子	* アラブリ
05	1981/01/01	甲寅	シヨングチ (旧正)
07	03	丙辰	* トビィブナー
12	08	辛酉	* イチカクムリ
20	16	己巳	ジルクニチ (十六日祭)
23	19	壬申	* 2月ミワクチャー
24	20	癸酉	* カンバナ
03/06	02/01	癸未	* 2月シマフサラ
12	07	己丑	* トマニゲー
18	13	乙未	ピンガン (彼岸)
04/07	03/03	乙卯	* サニチ (三月三日)
05/12	04/09	庚寅	* プサチマチ
22	19	庚子	* アミニゲー (アサニゲー)
31	28	己酉	* トリンバンユレ
06/02	05/01	辛亥	* トビムヌニゲー
03	02	壬子	* ナーブリ
12	11	辛酉	* スクマンマチ
12	11	辛酉	* ナンガクムリ
12	11	辛酉	* カナムヌソージ
24	23	癸酉	* シピランカアギ
07/01	30	庚辰	* ヌブリ
03	06/02	壬午	* プリブチ
04	03	癸未	* シマフサラ
09	08	戊子	* ミワクチャー
10	09	己丑	* カンバナ
11	10	庚寅	* プーリン
12	11	辛卯	* プーリン (アサヨイ)
13	12	壬辰	* アミジワー
14	13	癸巳	* アミジワー (ユーニゲー)
20	19	己亥	* トマニゲー
08/06	07/07	丙辰	七日ソーリン
12	13	壬戌	ソーリン (シキルピン)
13	14	癸亥	ソーリン (ムシャーマ)
14	15	甲子	ソーリン (ウグルピン)
15	16	乙丑	ソーリン (イタシキバラ)

\*は神行事 (波照間島民俗芸能保存会1982による)

には来訪神は登場しない。こうした波照間島の三つ来訪神について、儀礼を中心に分析したいと思う。

であり、八重山の中心である石垣島の中心部から約六〇キロ西南の海上にある。一九八〇年現在の波照間島の世帯数は二三五世帯、人口は六四四人である。

二、波照間島の年中行事の構造とムシャーマ

波照間島は沖縄県の南端に位置する八重山群島のなかでも最南端の島

波照間島はいずれも島の内陸部に位置する外(富嘉)、名石、前、南、北の五つの集落からなり、集落はふつう島のひとびとによって「部落」

表二 神行事日程表 昭和59年度 波照間公民館

月日	行事名	備考
5月18日	みずのえね	
27日	かのととり	村アサ ミキ クパン マンズ
27日	かのととり	村アサ ミキ 花米28日
27日	かのととり	村アサ 花米
6月8日	みづのととり	トネ元家 チータガ
15日	かのをたつ	
17日	みづねうま	
18日	みづのとひつち	村アサ 花米
23日	つちのえね	村アサ ニンニク ミキ
24日	つちのえね	村アサ グソミ
25日	かのをたつ	豊年祭
26日	かのをたつ	豊年祭
27日	みづのえたつ	
28日	みづのとみ	
7月4日	つちのえたつ	村アサ ミキ 花米
9月1日	つちのえたつ	9月1日〜4日まで
13日	かのをたつ	村アサ 花米
14日	かのをたつ	トネ元家 チータガ
10月5日	みづのえさる	村アサ 花米 ミキ
6日	みづのととり	村アサ グソミ
11日	つちのえたつ	村アサ 花米 ミキ クパン
16日	みづのとひつち	マンズ
21日	つちのえね	村アサ 花米
22日	つちのえたつ	村アサ 花米 23日まで
23日	かのをたつ	北南前名石村アサ
31日	つちのえたつ	クパン 花米 ミキ マンズ
11月3日	かのをたつ	村アサ 花米 11月2日マデ
		4日マデユマチ

とよばれている(図一「波照間島集落図」参照)。波照間島のもっとも古い集落とされている外は島のやや西部に位置しているが、そのほかの四集落は島のほぼ中央部にかたまって位置している。各集落にはワーとよばれる御嶽があり、集落に居住するひとびとは家族単位にこれらのワーに關係している。また、御嶽の神行事にかかわる女性神役のツカサやバナヌファなどの神役組織は、各部落単位に構成されるなど、各部落は政治的にも宗教的にも一定の独立性を保持している。しかしながら、ワーとの關係は家族単位との關係のほかに、個人単位との關係もきわめて重要な意味をもっており、この点においてはワーとの關係は部落単位に明確に区分されるわけではない。しかしながら、本稿で問題とするムシャーマやソーリンは神行事ではないから、ワーやツカサ、バナヌファはこの行事には關係しない。また、盆の墓参りの対象となる墓は、五つの集落の周辺部の散在しており、波照間島にはいわゆる墓地はない。

波照間島の年中行事の中心をなす神行事は、数も種類も多くきわめて複雑な構造を特徴としている(表一)。神行事の日程は干支にしたがつて決められ、旧暦で表示される。毎年旧暦九月、十一月、四月の三回開催されるバンユレーとよぶ行事において、五つの御嶽のツカサと公民館の役員による日選りによって日程が決定される。決定された日程は「神行事日程表・昭和〇〇年度」(表二)と題する表にまとめられ、ガリ版で印刷されて各家庭や共同売店に配布され、目につく場所に掲示される。

波照間島の神行事は旧暦八月上旬の癸巳のシッシン(節祭)に始まり、旧暦六月上旬の豊年祭であるプーリンとアミジワーで終了する。シッシ

ンは一年の始めの行事であり、プーリンは粟や稲の収穫感謝祭、アミジワーはつぎの年の収穫祈願の行事である。このように波照間島の年中行事の特徴は、第一に、神行事の一年が旧暦八月に始まり、六月に終了することである。住谷一彦・クライナー(一九七七)によれば、これは波照間島の主要な穀物である粟の農耕過程と神行事との対応を意味しており、旧九月の粟の種蒔きが農作の開始であり、旧暦四月か五月のその取り入れから六〇日目がプーリンであるという。第二に、波照間島の農業暦は、白夏(旧九〜二月)、春(旧一〜三月)、若夏(旧四〜六月)、南風夏(旧七〜八月)の四つの時期に区分できることである。このうち神行事は、白夏、春、若夏の三期にわたって行われるが、ツクルニガイ(豊稔祈願)、ヌブリ(天候祈願)、カンパナ(神への供物をおさめる行事)、アミニゲ(雨乞い)、ヒブリ(水祭り)など神行事のうちのいくつかは一年に三回、三期に一回ずつくりかえし行われる。したがって、神行事は三周期をなしているといえる。第三に、神行事の季節と祖先祭祀行事の季節が明確に区分されていることである。農閑期である南風夏は、神行事ではなく祖先祭祀の季節であり、この時期に盆行事や法事、洗骨などが集中して行われる。この報告でとりあげるムシャーマと盆行事は、南風夏に行われる祖先祭祀行事とされる行事である。

こうした波照間島の年中行事の特徴は、日本本土の一般的な年中行事の構造とは明らかに異なっている。日本本土の年中行事では、一年は一月の正月に始まり、一二月の大晦日で終了し、行事のいくつかは2回行われるところから、折口信夫(一九三二)や田中宣一(一九八四)が指摘する

表三 盆行事の日程(一九八四年)

新暦	旧暦	行事	内容
8月3日	7月7日	ナンガソーリン	ムシャーマの役割分担の決定。
8日	12日	シラスピン	ムシャーマの予行練習。
9日	13日	シキルビン	先祖棚の掃除と供物、墓まいり
10日	14日	ナカヌビン	ムシャーマ
11日	15日	ウグリピン	アンガマ、先祖送り
12日	16日	イタシキバラ	共同作業、ムラザレ、獅子舞

ように年中行事は二重の構造をもっているが、波照間島の年中行事はいわば神行事に限定しても三重の構造をもつといえる。しかも、日本本土においては神行事と祖先祭祀行事の季節的な区分は明確ではない。

しかしながら、現在波照間島で行われているムシャーマ行事には、神行事であるアミジワーの儀礼の一部が組みこまれている。これにはつぎのような歴史的経緯があると伝えられている(波照間民俗芸能保存会一九八二)。かつて波照間島では、一年の神行事の最後にプーリン(豊年感謝祭)とアミジワー(豊年祈願祭)が行われていた。アミジワーの二日目のエンヌユーニゲ(来年の豊作祈願)には、仮装行列と綱引きが行われていたという。綱引きは島を東西の二組にわけて行われ、古い村とされる西組が勝れば豊作と信じられてきた。その綱引きの勝敗をめぐって喧嘩沙汰が絶えず、島の役人の処置により、豊年祭は御嶽における祈願と雨乞い、および巻踊りと呼ばれる踊りのみに限定し、綱引きは中止、仮装行列は盆行事のムシャーマに移すとされた。一七七年の津波以後、波照間島出身者によって集落が再建された石垣島白保や大浜の豊年祭では、ミルクを先頭とする仮装行列が今日でも行われている事実

から、この処置は一七七一年の津波以前と推定されている。したがって現在のムシャーマ行事には、盆の行事としての性格に加えて豊年祭としての意味が付加されている。

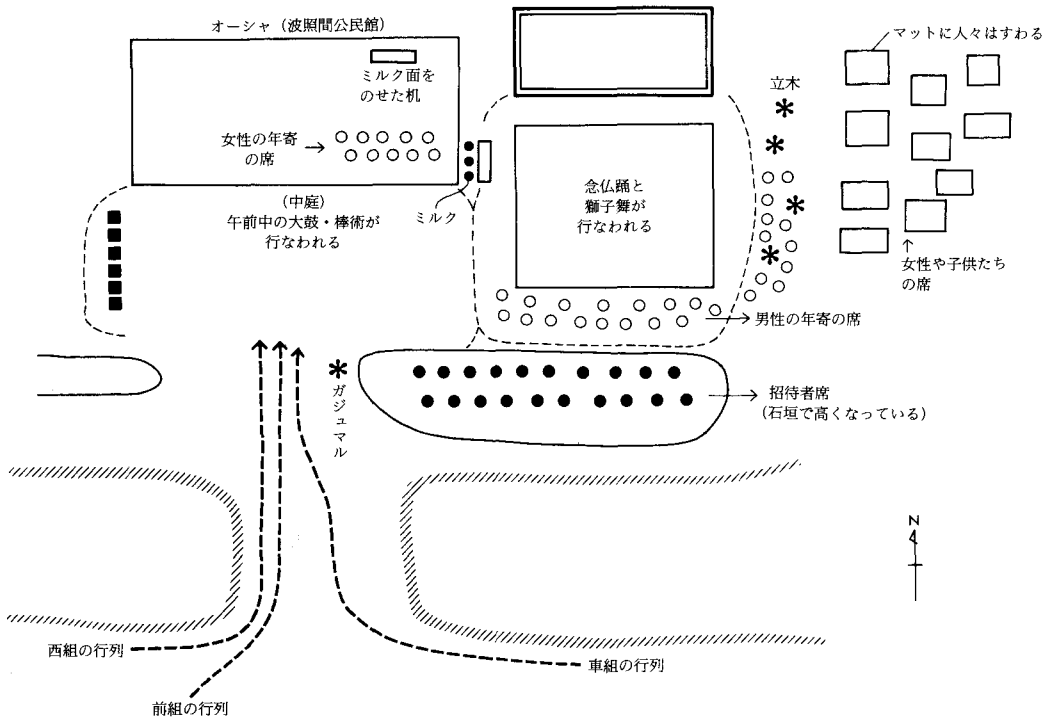
ムシャーマ行事は現在、波照間島の五部落を西、東、前の三つの組にわけて、三組の対抗の形で行われるが、勝敗をつける儀礼はない。西組は外と名石の二部落、東組は北と南の二部落、前組は前部落からなる。各組はムシャーマの準備をそれぞれの部落の公民館で整え、当日の儀礼においても、それぞれのミルクを先頭に別々の隊列を組んで島の中央部に位置するオーシャとよばれる波照間公民館まで行列し、舞踊や民謡も別々に演じる。公民館と公民館の前の広場がムシャーマ行事の主たる舞台である。ムシャーマはもともとは、西組と東組に別れて島の双分制的行事として行われていたが、前部落の戸数の増加などによって、明治三六年（一九〇三）から、前組が独立した組となって三組で行われるようになり、現在に至っている。独立以前は、前組は部落を二分して東西の組に分割して所属していた。3組のうち、本稿では東組を中心にムシャーマを観察した。ムシャーマ行事は波照間公民館主催の行事として行われる。代表者は公民館長（区長を兼任）である。盆の中日に行われるので、石垣島や沖縄本島からも島出身者が島に帰り、島の人口が一挙にふくれあがるなかでにぎやかに行われる行事である。

### 三、ムシャーマ行事の儀礼過程

#### (一) 準備

一九八四年のムシャーマを含む盆行事の日程は表三の通りである

ムシャーマの準備は八月三日（旧暦七月七日）のナンガーソーリンから始まる。この日に各組の役員が集合して、ムシャーマ行事の役割分担を決定する。一九八四年の東組では、南部落の会館に集合して役割分担を決め、以後ムシャーマが終了するまで分担表が黒板に書かれる（表四）。東組では北と南の両部落が毎年交替で会館に集合する。したがって、翌年一九八五年には北部落の会館に集合して準備が行われた。役割分担のなかではミルクの役割がもっとも重要であって、東組では老人クラブに入る一年前の男性がとめることになっている。したがって、波照間島の男は一生に一度このミルクの役をとめることになる。順番に交替でとめる点では各組とも共通である。この年東組のミルクの役をとめた人は五九歳であった。戦前まではミーチムンといって、三年間死者を出さなかつた家族の者がミルク役をとめたとされたが、戦後になつてこれはくずれたという。主な役としてはこのほかに、プープザー、魚つり、獅子などが決められる。一般にミルクは女性とされる来訪神であるが、東組でも女性神と認識されている。プープザーはミルクをすてて旅立つた男という設定になっている。プープザーや獅子もミルクと同様に、かつては三年間死者を出さなかつた家族の者がとめたという。役割分担が決定すると早速練習が開始され、毎晩のように会館に集合して夜遅くまで練習がくり返される。練習は八月八日（旧暦七月二日）のシラスピンの日まで行われる。また、シラスピンの日には、旗、ミルクの面・衣装、獅子、太鼓などムシャーマに必要な道具・衣装類の点検と準備が



第2図 オーシャ (公民館) 周辺のムーシャマの会場図

会館で行われる。一方、島全体のムシヤーマの準備が波照間島公民館の役員を中心に毎晩のようにオーシャ (波照間公民館) に集合して行われる。ムシヤーマの前日のシキルピンの晩にも役員が公民館に集まって、ムシヤーマの最後の打ち合わせが行われた。

(二) ムシヤーマ

八月一〇日(旧暦七月一四日)、ナカヌピンとよばれる盆の中日にムシヤーマは行われる。以下では東組を中心にムシヤーマの儀礼をみることにする。東組では朝八時頃に南部落の東端にあるガジュマルの木のもとに役員とミルク、ブーブザーの役をとめる四五人が集合して出発前の儀礼を行う。真新しい下着姿になったミルクとブーブザー役が、白布の上に置いたミルク面と衣装を小机の上に乗せ、東の方向に向かって小机の前に座り、焼酎と簡単な料理(砂糖テンプラ、蒲鉾、卵焼きなど)の供物を供えて、手を合わせて拝む。このあとミルクは面と衣装をつける(ミルクの衣装、持物についてはのちに詳しく述べる)。ブーブザーも衣装をつけて、ともに南部落の西端まで移動して行列の出発を待つ。この頃には、行列に参加する東組の子供や棒、太鼓などの役をとめる人々もそれぞれの衣装をつけてこの場所に集合する。一九八四年のムシヤーマの行列は東組から開始された。行列の順序は東組、前組、西組の順で、毎年ひとつずつずれることになっている。

東組の行列はドラの音を合図に午前九時に開始された。東組の行列の順序は以下の通りである。

- 一、旗 (ブーブタ) 一人



二、ナーリ	一人
三、ミルク	一人
四、スクテン	一人
五、カンゴンタマー	二人
六、ミルクンタマー	一〇数人
七、ミルクヌジー	一〇人
八、マミドーマ	一〇数人
九、かりゆし節	二人
一〇、稲摺節	七人
一一、ブーブザー	一人
一二、馬ブシャー	六人
一三、六調節	五人
一四、鳩間節	一〇人
一五、ハリエー	二〇数人
一六、海のチンボーラ	五人
一七、棒	五人
一八、魚釣り	一人
一九、太鼓	八人
二〇、獅子	四人
	合計 約一三〇人

東組の行列の先頭は、「太陽に「東」という字を大きく書いたブープタ」とよばれる旗である。太陽は東組の旗のシンボルであり、旗には「祈豊

年」とかかれた紙の幟がつけられている。旗は組によって異なり、前組の旗には「五風十雨」、西組の旗には「祈豊年」と書かれている。旗には旗頭はないが、それにかわる簡単なかざりがつけられている。旗につづくのがナーリとよばれる竹に色とりどりの五穀の実をあしらってかざりつけたものである。東組のナーリにも「祈豊年」とかかれた紙がつけられていた。ナーリの次はミルクである。ミルクは右手に大きな扇、左手に二メートルほどの長さの杖を持ち、扇を左右に振りながらゆつたりと歩みを進める。ミルクにつづくのが、ミルクが休憩する時の椅子をもつスクテンとよぶ子供（男）と、稲、粟、麦、きび、豆などの五穀の粃や種をいれたカゴを持つカンゴンタマーとよばれる二人の子供（女）である。五穀の種は農耕儀礼としてのムシャマ行列を象徴するものといえる。カンゴンタマーの後ろには手に手に日の丸の小旗をもった一〇数人の子供たち（男女）がつづく。この子供たちはミルクの子供たちという設定で、母親であるミルクのあとにつづくことされている。ここまでが行列の先頭の部分であり、ミルクとその子供たちが中心である。

このあとにさまざまな民謡などを歌い踊るいくつかの出し物がつづく。最初はミルクヌジーとよばれる弥勒節を歌う年配の女性の一回である。この一回はミルクを取り巻く女性たちである。女性たちは白や緋の服をつけ頭にははちまきを巻いている。手には太鼓、笛、三味線もち弥勒節を歌いながらオーシャに向かう。ミルクヌジーの後にはマミドーマ（豆どうま節）がつづく。マミドーマは鎌、鍬、へらなどを持ち農耕の所作を表現する一回で、東組では大人・子供の男女一〇数人で構成され、豆

どうま節を歌いながら行進する。そのあとには年配の女性六人と三味線の男一人の稲摺節がつづく。女性たちは白い布を二人で持って稲を摺る所作をしたり、箕をもって粃殻をとばす所作をしながら稲摺節を歌って行進する。つまり農耕儀礼にふさわしい、農耕の所作をする一団である。女性たちのなかには顔に道化のような飾りをつけた人もいる。この一団は行列の中でも道化的な所作を特徴としている。稲摺節のあとには、若い女性によるかりゆし節がつづく。かりゆし節は航海の安全を祈願する歌である。行列のこのあたりから後半では、ミルクを捨てて家を飛びだしたという設定で醜い姿をしたブーブザーが動きまわる。ブーブザーはクバの皮のかぶりもの、面はないが顔全体を覆う長い髭、腰にぶらさげたタバコ入れなど独特の姿で、右手にはクバのうちわを持ち、左手にはミルクと同じような長い杖を持つ。ブーブザーはミルクに近づいてはいけなさとされ、時には長い杖でうしろの獅子をあやしたりもする。稲摺節のあとには馬ブシャーの五人と三味線一人がつづく。馬ブシャーは馬をかたどったものを体の前にあてて、轡を引く所作をしつつ崎枝節を歌いながら行進する。馬ブシャー役は中学生(女性)であった。馬ブシャーにつづいて六調節と鳩間節とおもわれる歌を歌う年配の女性がつづく。そのあとには東組独特の出し物であるハリエーである。ハリエーは子供たち一〇数人が、マミドーマと同じように鎌、鋏、へらなど手にもって行進する。ハリエーの後は、頬かぶりをして赤いふんどしのようなものをつけた年配の女性五人の団で、これは海のチンボーラーとよばれる。海のチンボーラーはユーモラスな所作をくりかえしながら行進する。稲

表四ムシャーマ役割分担(東組)(一九八四年)

ミルク	西里幸一
三味線	佐事清祐
笛	底原壮吉
ブーブザー	宮良真幸
釣手	船附豊彦
俵まき	津久トノ正男
米つき	船附正幸、加屋本清吉
サーサー	白保昇
タイコ	慶田本長幸、新城永祐
棒	野原秀信、大泊栄一、美底清照、大本善男
	野原俊一、東田勝吉、屋良部功、阿保勢守夫
	田島松、白保友助
	高校生底原樹生、底原政一、新本
	新城健一、野原秀与
シーシー	内間邦有
コンギ	新城清吉、大泊政一、後仲筋清忠、貝敷祐助、内原照保
座	田盛真幸、出地清祥、加屋本善吉、東里昌夫
余興	阿利盛八、通事孝吉、田盛敏一、加屋本伸光
花造り	佐事清祐、松本栄吉、野原宏栄、大高安昇、宮良真幸、
西里幸一、底原壮吉	
三味線	野原宏栄

摺節の一団とともに行列のなかで道化的な演技をくりかえす。この年の東組の出し物のなかではこれは唯一の際物ともいうべき出し物である。つぎの魚釣りは、かつて波照間島でさかんに行われていたカツオ漁の所作を真似しながら行進する。魚釣りのあとには棒がつづく。棒のちにオーシャで棒術を披露する若者の一団であって、手に手に棒をもち、棒を打ちながら行進する。棒の後には太鼓がつづく。太鼓は八人のこれも白地の衣装に赤い飾りをつけたあでやかないでたちの若者で、太鼓を持ちながら行進する。笛をならす大人三人が側につく。東組の行列の最後は

獅子である。獅子は二体でこれにひとりづつ若者が入る。獅子には赤い鬼の面を被った囃子がひとりずつつく。獅子と囃子は獅子舞をくりかえしながら行進する。こうして東組の一九の出し物、約一三〇人にも及ぶ行列は、約三〇分程で会場となる島の中央のオーシャに到着する。東組

表五 ムシャーマ行列の順序(一九八一年)

番号	東組	前組	西組
1	大旗(東)と太陽	大旗(五風十雨)	大旗(祈豊年)
2	ナリー(実り)	ナリー(実り)	ナリー(実り)
3	弥勒(その椅子持ち)	弥勒(その椅子持ち)	弥勒(その椅子持ち)
4	五穀の籠	五穀の籠	五穀の籠
5	弥勒の子供(小旗)	弥勒の子供(小旗)	弥勒の子供(小旗)
6	弥勒節	弥勒節	弥勒節
7	かりゆし節	かりゆし節	かりゆし節
8	豆どうま節	豆どうま節	豆どうま節
9	稲擦り節	稲擦り節	稲擦り節
10	魚つり	崎枝節	天川節
11	ハーリーエー	からちゃん踊り	崎枝節
12	うりずんの歌	六調節	波照間島ぬミンビィガ
13	六調節	山崎ぬアブジャーマ	六調節
14	崎枝節	ブーブザー	
15	海のチンボーラー	魚つり	さいさい節
16	楽隊	パピル節	祖平花節
17	カタクムリヤー	ポー(棒)	海のチンボーラー
18	鳩間節	テーク(太鼓)	世界報節
19	鳥の舞(六調節)	シィーシィ(獅子)	南洋の土人
20	谷茶前節		護美取り
21	川良山節		シマフサラー
22	たこ取り		ブーブザー
23	ブーブザー		ポー(棒)
24	ブーブザー		テーク(太鼓)
25	テーク(太鼓)		シィーシィ(獅子)
26	シィーシィ(獅子)		

(波照間島民俗芸能保存会一九八二、三二頁)

につづいて、同じようにミルクを先頭にした前組、つづいて西組の行列がオーシャに到着して、祭りの雰囲気は一気に盛り上がる。すべての組がオーシャに到着したのは出発から約一時間経過した一〇時頃であった。これまで東組の行列を見てきたが、他の組の行列はすこしずつ異なる部分と異なる部分とがある。一九八四年には他の組の行列のすべてを把握できなかったもので、三年前の一九八一年について各組の行列の順序をみると表五にのとおりである。全体的にみれば西組・東組の行列にくらべて前組の行列はやや少ない。これは前組の戸数が西組・東組にくらべて少ないことに関連していると思われる。行列は年によって多少の変化があるほか、東組の「海のチンボーラー」、西組の「南洋の土人」「護美取り」のように、新しい出し物やその時々話題を盛り込んだ出し物も少しは登場するが、基本的部分は各組とも共通しており、年によっても変化がない。基本的部分をなすのは、行列の先頭部分のミルク、ナリー、五穀の籠、ミルクの子供、後半部分のブーブザー、棒、太鼓、獅子などである。ミルクは組によって面や衣装が異なる。たとえば、前組のミルクは帯をしめないし、扇の絵柄にもわずかな差異が認められる。ブーブザーは波照間島独特の出し物と思われるが、これは差異がない。行列の基本的部分以外の出し物は年によっても変化し、また若干組による差異がある。たとえば、ユーモラスな所作で観衆をわかしていた「海のチンボーラー」は東組独自の出し物であるし、かつて豊年祭アミジワの最後、招待客が帰るときに歌われたとされている「波照間ヌミンビィ

「ガ―」は西組だけの出し物で他の組には登場しない。

また、一九八四年のムシャーマ行列において注目されたのは、前組にだけ登場したフサマラーである。雨の主とされる来訪神フサマラーはもととはアメニグーとよばれる雨乞いの行事に登場したものであって、ムシャーマ行事に古くから登場したものでではない。宮良高弘（一九七二）によれば、早魃が激しかった一九七一年のムシャーマにも登場したという。その当時の写真には、トラックの荷台に乗った一体のフサマラーが見える。一九八四年に登場したフサマラーは合わせて六体で、瓢箪でつくった面をかぶり、からだ全体を夕顔やナーベの葉で覆い、手にはマニの葉の杖をもつという姿であった。フサマラーの一人は水を入れた瓶をリヤカーにのせて行進した。フサマラーに扮していたのは若者六人で、うち二人は女性であった。フサマラーは行列の最中にブーブザーと一緒に子供を脅かしたりしていたが、子供たちもあまりこわがったりしないようであった。しかし、前日の雨の残った水溜まりをみつけるとフサマラーは、マニの葉でこれをたたき晴着を着た女性たちに泥水をかけるなどの所作をくりかえしていた。

すべての組の行列がオーシャに到着したのち、オーシャの周辺でいよいよ各種の芸能が行われる。会場の状況は図二のオーシャ周辺のムシャーマ会場図に示すとおりである。各組の行列はオーシャに入ると解散し、人々はそれぞれの席につく。席はまずつくられた舞台の正面に招待者の席があり、竹富町長や学校の先生などがこの席につく。その他はおよそ男女別々の場所に席を取る。年寄の女性はオーシャの中、男性は招待者

席の前につく。一般の男性は立木付近、一般の女性や子供たちは立木のうしろにビニール・マットなどを広げてすわる。招待者には弁当と酒が出されるが、その他の人々は料理や酒を持参する。奄美地方に多くみられる一重一瓶に近い形をとるが、持参した酒肴を交換する儀礼はみられなかった。ミルクは面を取り、衣装をぬいでオーシャのなかの机の上に置き、オーシャの脇の席に普段着にもどって着席する。したがって、波照間島のミルク役はムシャーマ行事をとおしてミルクになりきるわけではない。ミルクの三人にも弁当と酒が用意される。

一〇時頃からまず、太鼓（テーク）と棒術の演技が組ごとに行われる。演技の順序は行列の順序と同じように、東組、前組、西組の順である。テークは各組一六人で行われ、太鼓打ちと囃子手が向かい合って太鼓を打つ。棒は各組一〇人ずつで行われ、なかには実物の刃物を棒の先につけた迫力ある棒術もある。一時間ほどで太鼓と棒術は終了すると、大半の人々は家に帰って昼食をとるが、一時すぎからは、舞台の前で棒術の若者を中心とする参加者が輪になって、無蔵念仏節を歌いながらニンブチャー（念仏踊り）が行われる。輪の中心には供物と酒が供えられる。ニンブチャーは各家族では祀られない無縁仏を慰霊する儀礼であるときれ、ソーリン・ムシャーマの中心の行事とされている（波照間民俗芸能保存会一九八二）。ニンブチャーは物静かな雰囲気なかで行われ、一〇分程で終わる。これでムシャーマの午前中の行事は終了する。

午後の部は午後一時半から開始される。公民館長や竹富町長の挨拶ののち、舞台での民謡、踊り、狂言、コームツサーとよばれる踊りが演じ

られる。上演の順序は行列の順と同じで、東組、前組、西組の順である。一つの題目が終わると、次の組の題目に移る。各組が演じる題目は一部共通するが、ほとんどは各組独自のものである。前組の題目はやや少ない。題目には行列にみられた共通性は稀薄である。民謡や踊りは静かに演じられるが、狂言には観衆がどっと沸く場面が多く、祭らしいにぎやかな雰囲気となる。一時半からはじまった上演は延々と五時頃まで続いた。舞台での上演が終わると、一斉にあとかたづけが行われ、そのあとに獅子舞が行われる。大勢の観衆が取り囲むなかで、三組六頭の獅子がいつしよに舞う姿は壮観である。五時半近くになって獅子舞が終わると、各組は朝オーシャに来た時と同じように、ミルクを先頭に行列をなしてそれぞれの組の会館に帰る。帰る順序も東組、前組、西組の順である。朝の行列に比べれば、やや人数は少ない。各組の行列が去ったあと、オーシャでは招待者や公民館の役員らが輪になって、弥勒節やヤローヨー節を歌いながら踊る。オーシャでのムシャーマの行事はこれですべて終了する。

各組の行列は二〇分ほどかけて各組の会館にもどる。他の組は定かではないが、前組では会館の前庭にミルク、プープザー、組長、棒術の若者が輪をつくってニンプチャー（念仏踊り）が行われる。これは各部落の無縁仏に対する供養として行われると考えられる。そのうちに老人や女性たちも加わって、四〇分もの長い時間、ニンプチャーが静かに行われた。ニンプチャーが終われば、さらに一時間程、それぞれにジュース、コーラ、泡盛での宴がつづく。すべてが終わって、前組の人々が解散し

たのは八時すぎであった。

### (三) アンガマ

ムシャーマの翌日のウグリピン（先祖送り）の夜にアンガマが行われる。夜八時にオーシャに公民館の役員一〇数人と飛び入りの人二〜三人が集合した。全員男性であるが、女性の服を着て顔にはそれぞれが用意した面をつけ、頬かぶりをした異形の姿で集合する。面は職人のつくった木製の翁媪の面やセルロイド製と思われるキューピーやミッキーマウスの面がそれぞれひとりずつあったが、他はすべて紙に顔を書いた手製の面であった。波照間島のアンガマ面の特徴はこうした自由な手製の面にある。オーシャに集合した役員たちが、島の主な家々をまわってそれぞれの家族で祀られている先祖を供養するのが波照間島のアンガマである。一九八四年には外、名石、前、南、北の順序でまわることになり、軽トラックに乗って外部落へと向かった。アンガマの一行は、ドラをならしニンプチャー（念仏）を歌いながら訪問する家に近づく。訪問をうける家から見れば、ドラの音が訪問を知らせる合図となる。道々でときどき子供たちをからかったりすることもある。訪問する家には近所の人が大勢あつまってアンガマの訪問を待っている。アンガマの一行は家につくと、縁側から二番座に上がる。まず酒（泡盛や缶ビール）と料理が出され、もてなしを受ける。そのうちに代表がさまざまな供物が供えられている先祖棚の前に進み出て、その家の先祖にお参りをする。この間、アンガマが家の人やアンガマどうして話をする時はすべて裏声である。そのあとまたしばらくの間、酒のみ料理を食べたのち、ドラの音に合

わせて一同そろってニンブチャー（念仏）を歌う。五分程ニンブチャーを歌うとその家の訪問は終了し、つぎの家に移る。集まった近所の人々は一軒あたり一五分程度の訪問を縁側から眺める。この日の波照間島のアンガマでは、石垣島などで行なわれているアンガマと観衆とのユーモラスな掛け合いなどはみられなかった。ときには子供たちが裏声で会話するアンガマたちをからかったりするが、アンガマが縁側から外に出ると、子供たちは逃げまどう。こうしてつきからつきへとほぼ同じようにして家々をまわる。この日のアンガマは二〇軒近くの家々をまわり、一時間すぎにようやく北部落で終了した。アンガマ行事がすめば人々はそれぞれの家族で先祖を送る。

（四）イタシキバラ

ウグリピン（先祖送りの日）の翌日の八月二日（旧暦七月一六日）にイタシキバラが各部落単位に行われた。イタシキバラ行事の中心は、ムシャーマの道具のあとかたづけの共同作業とムラザール（村浚い）である。この日の東組南部落のイタシキバラはつぎのようであった。

早朝、各家ではウグリピン（先祖送り）で家の入口の前に置いた供物をかたづけただあと、七時頃大人たちが会館前の広場に集まる。例年なら排水路掃除などの共同作業が行われるが、この日は天候も悪かったので共同作業は中止となり、人々はいったん家に帰った。九時頃ふたたび会館に集合し、昼頃までムシャーマの道具のあとかたづけや決算の作業を行った。女性たちは役員の家に集合し、衣装を干したり畳んだりのあとかたづけをした。ムシャーマの費用の決算は、かかった費用の各戸への

割り当てを決定するのが主な作業である。一九八四年の東組ではつぎのようにして費用が割り振られた。当時の戸数は北部落四〇戸、南部落三戸の計七一戸であった。一戸あたりの負担を九二〇円（この額は男女ひとりあたりの割当金の合計額である）とし、戸数割で六五、三二〇円を割り当てる。つぎに男女の大人の数を計算し、男一人は五四〇円とし、四七人で合わせて二五、三八〇円を割り当てる。女一人には三八〇円とし、四八人で一八、二四〇円を割り当てる。こうして合計一〇八、九四〇円の金額を集めることとした。東組のムシャーマにかかった費用は一〇八、一二一円であったから、これで費用をまかなえることになる。結果として戸数割で全体の約六〇％、人数割で約四〇％を割り当てたことになる。この費用割り当ての原則は、基本的に各戸対等の原理と、男女差はあるものの、大人の人数割りによる実質的平等の原理を加味した方式であるといえる。戸数割のみであれば各戸の形式的平等は確保されるが、一人暮らしの場合に負担が大きくなるからである。この費用割り当て方式から判断すれば、波照間島の社会原理は実質的な各戸対等を基本としているといえよう。

老人たちは、二時頃からゲートボールで楽しんだあと、五時頃から酒と料理を持って広場に集まって、宴を催しながらニンブチャー（念仏踊り）を踊る。ニンブチャーによって集落に残っている悪霊を追い出すのだという。宴と踊りは一時間ほどつづき、六時頃からは老人たち（男女）一〇数人が一団をなして、ドラ、タイコを打ちならし、悪霊を払う歌を歌いながら南部落中をまわる。とくに、北部落との境界では老人たちが

一列にそろって一斉に片足を挙げて、悪霊を北部落の方に追いやる所作をする。そしてまた部落をまわって会館にもどる。これがムラザレである。家に戻って夕食を食べたあと、ふたたび老人たちが会館の広場に集まり、ドラをたたき笛を吹きながら獅子舞を舞う。子供たちや大人たちも大勢あつまり、獅子はしばらくのあいだ広場いっぱいに舞う。「他の日にはあばれないように、この日だけは獅子にあばれさせるのだ」という。獅子舞は三〇分足らずで終了し、八時半頃にはイタシキバラのすべの行事が終わる。イタシキバラの行事は各家族で祀られる正当な先祖以外の先祖、すなわち盆をすぎても集落にとどまっている悪霊、すなわち無縁の先祖を集落から追い払うのが中心的な意味と考えられる。波照間島では、ムシャーマ行事のオーシヤでのニンブチャー、各組の会館でのニンブチャー、そしてイタシキバラ行事における各部落単位のニンブチャーと無縁の悪霊を払う行事が何度も行なわれ、その数が多さが特徴といえよう。

#### 四、家族単位の盆行事の儀礼過程

ここでつぎにムシャーマに平行して行われる家族単位の盆の祖先祭祀行事に目を転じて向けてみよう。波照間島の盆行事は八月三日（旧暦七月七日）のナンガートーリン（七日盆）から始まる。この日、各家族では先祖棚に酒と簡単な供物を供えて、盆が来たことを先祖に知らせる。盆の準備のための買物は共同売店で行なう。<sup>7)</sup>一九八四年は台風の影響でシキルピンの日までしばらく石垣島からの定期船が来なかつたので、シ

キルピンの日は、共同売店にたくさんの人々が盆の買物に集まり、にぎやかな買物風景であった。

八月三日（旧暦七月一三日）のシキルピン（先祖迎え）の日に、各家族では墓から先祖を迎えて、いよいよ本格的な盆行事が始まる。墓参りの前にまず、先祖棚の供物の準備を始める。南部落のある家族では、準備するのは世帯主（男性）である。この日準備したのは生花、果物の盛物、グサンとよばれるサトウキビの束、餅、ダンゴ、花米（重箱に入れたもの二つ）、タチブシン（高膳の上に徳利に入れた酒二本と塩）、茶、砂糖菓子（魚や花をかたどった原色の菓子）などの供物で、これを先祖棚に供えて先祖棚を飾る。

先祖棚の準備ができれば、各家族単位にそれぞれの墓参りをして先祖を迎える。北部落のある家族の先祖迎えは以下のようなようであった。夕方世帯主ひとり、酒、水、茶、菓子、線香をもって軽トラックで墓参りにかけた。この家族の墓は、島の北西部にある港のそばで、軽トラックで五分程かかった。波照間島の墓地はヤマとよばれるやや高い場所があり、集落の北から北西にかけてあるのが多いが、南側にも散在している。墓は家族単位であり、いわゆる墓地は形成されていない。墓の形態はほぼ三つの型があり、もつとも古いのがサンゴの石を四方に積み上げて、上を大きな石で覆った墓であり、前側に六〇センチ四方程の入り口がある。同行した家族の墓はこの型であった。波照間島では、死体は墓に納め、死体が朽ちた頃に取りだして洗骨し、骨だけを壺に入れてふたたび墓に納める。第二の型は、いわゆる亀の甲羅の形をした亀甲墓で、これ

はコンクリート製である。この型はサンゴの墓につづいて古いと考えられる。第三は、もっとも新しい型であつて、同じコンクリート製でも家型につくつた墓で、このなかには屋根の上には石塔を乗せたものもある。石塔には「後富底家之墓」「波照間家之墓」などと書かれているものが多い。最近では、本土の影響か、このような石塔を乗せた墓が多くなつてい

る。墓参りはまず草が生い茂つた墓の掃除から始まる。波照間島では墓に参るのは、一月一六日の十六日祭（ジルクニチ）と盆の旧七月一三日の二回のみであり、その他は墓には近づかない。波照間島では清明に墓参りはない。したがつて、墓参りは六か月ぶりであり、墓は夏草で覆われていた。炎天下これを除くのがひと仕事であつた。掃除が終わると、酒、茶、菓子をおえ線香をたいて参る。これで墓参りは終わる。

墓参りをして先祖を家族に迎えると、先祖棚に供物を供える。南部落のある家族の供え物は、二人分の膳と酒であつた。膳はジュシー（雑炊）、吸い物、新香、カツオの刺身、蒲鉾・天ぷら・鶏肉のからあげを皿に盛つたものの五品で、盆に乗せて供える。供物を供え終わると、世帯主が先祖棚にまいる。このあと、盆の中目、ウグリピン（先祖送り）の日まで食事や菓子、茶が先祖に供えられる。確認できた限りでは、ウグリピンの朝には御飯、新香、卵、吸い物がやはり二人分供えられた。盆の期間中にはまた、親族どうしでお互いの先祖棚を参りあう。

そして、ウグリピン先祖送りの日は夜八時頃からアンガマが行われるが、アンガマが終わつて世帯主が帰つてきた夜中一二時頃から先祖送り

が始まる。まず、先祖棚に供物を供える。この時の供物が最も多い。酒、茶、菓子、皿に盛つた蒲鉾・天ぷら・鶏肉のからあげなど、吸い物で、それぞれ別々の盆に乗せられていた。供物を供え終わると世帯主、妻、息子の三人が先祖棚の前に座り（この家族はこの三人）、手を合わせる。世帯主は供物の内容を出して先祖に説明する。そのあと、タチブシンの酒を下ろして、世帯主、妻、息子の順にのむ。そのあと水を張つた金だらいで、世帯主と妻がウチカビ（紙銭）を燃やす。世帯主は「三セント分燃やす」と説明している。ウチカビを燃し終わると、先祖棚に供えた供物をつぎつぎに下ろし、金だらいに入れて家の門口の前までもつて行く。かつては部落のはずれまで持つていったが、最近ではサトウキビが多くなり、それをカラスが食べて危険だといふので、各家の門口になつたという。門口では世帯主が線香をあげたのち家族が拜んで、先祖を送る。これで先祖送りは終了する。すべてが終わつた時には、すでに午前一時をまわつていた。

## 五、考察

これまで一九八四年の波照間島のムシャーマ行事と家族単位の祖先祭祀行事について、実際に行なわれた儀礼を中心に記述してきた。ここではこの報告の最初に設定したいくつかの問題について分析し、考察を加えてみたいと思う。

まず第一に、ムシャーマ行事と家族単位の祖先祭祀行事の儀礼過程にかかわる問題である。最近のムシャーマ行事は沖繩本島や石垣島に居住



する大勢の島出身者の参加も得て、島をあげてにぎやかに行なわれ、波照間島の最大の年中行事としての性格をますます強めつつある。波照間島のほかの神行事がツカサヤパナヌファなどの女性を中心とする神役組織を中心に地味に静かに行われる傾向があるのに対して、ムシャーマ行事は観衆も多く、さわめてエネルギーシユな祭になりつつある。したがって、「護美とり」や「海のチンボーラ」など際物の出し物やフサマラーを始めとして、新旧のさまざまな要素がこのムシャーマ行事に集中する傾向が認められる。こうした状況のなかで行われたムシャーマ行事は、準備、当日の儀礼、あとかたづけなどの全体的な儀礼過程自体は、八重山の他の地域の豊年祭や節祭と共通する点も数多く、とくにきわだった特徴はなかった。また、家族単位の盆行事も先祖を迎えて、もてなし、そして先祖を送るという点では、沖縄やひいては日本本土の盆行事と構造的な差異はない。ただムシャーマ行事にニンブチャー（念仏踊り）が何度も行われていることや、イタシキバラの行事のなかで悪霊払いムラザレが行われること、また逆に家族単位の盆行事に無縁先祖に対する儀礼がまったく見られないことなどが注目される。このことは、ムシャーマ行事と家族単位の盆行事の意味の差や関係を示唆していると考えられるからである。

結論的にいえば、波照間島では正当な先祖に対する祭祀と無縁の先祖に対する祭祀を行事として明確に区分し分離しているといえる。つまり、ムシャーマ行事やイタシキバラなど村落レベルでの行事は、アンガマをのぞいては家族単位では祀られない無縁の先祖にかかわる祭祀であり、

これに対して家族レベルの盆行事は各家族の正当な先祖にかかわる祭祀であると考えられるのである。すでに述べたように、この二つの行事は時間的に平行して行われるが、両者の意味が異なるからこそ、むしろ平行して行われることに意味があるといえよう。波照間島にみられるこうした正当な先祖の祭祀と無縁の先祖の祭祀の分離が、八重山地域および沖縄の一般的な盆行事のありかたかどうかは今後検討すべき問題であるが、少なくとも奄美の形態とは異なる。たとえば奄美瀬戸内町管轄では、墓から迎えた各家族の正当な先祖を屋内で盆棚をつくり位牌をならべて祭祀するが、これとは別にかつてはミツダナ（水棚）を庭につくって料理、酒などの供物を供え、無縁の先祖をもてしたのである。ミツダナは奄美大島の盆行事では広く認められ、無縁の先祖が家屋のなかに入り込むのを阻止する意味もある。つまり、奄美では正当な先祖の祭祀とともに無縁の先祖の祭祀も家族レベルで統合的に行われていたのである。こうした奄美の盆行事は波照間島の盆行事のありかたと明らかに異なっているといえよう。波照間島において、ムシャーマ行事がもともと盆行事として存在していたかどうかはむずかしい問題であるが、豊年祭アミジワの行列が移行する以前にもムシャーマ行事が存在したという前提に立つとすれば、それはおもに無縁の先祖を供養する性格をもつ盆行事とみて間違いないであろう。

第二の問題は、ムシャーマ行事における祖先祭祀的要素と豊年祭的要素の問題である。ムシャーマ行事の儀礼過程の分析でも明らかのように、島全体の盆行事として行われるムシャーマ行事には、祖先祭祀的要素と

豊年祭的要素の双方が含まれている。祖先祭祀的要素はニンブチャー(念仏踊り)、獅子舞、ムラザールレ(悪霊払い)のように、おもに無縁先祖に対する行事である。これに対して豊年祭的要素には、幸福・豊穡をもたらすとされる来訪神ミルク、ムシャーマ行列における稲摺節、マミドーマ、ハリエー、波照間島ヌミンピイガーなどがある。祖先祭祀的要素についてはすでに分析したので、ここでは豊年祭的要素について検討してみよう。

波照間島の豊年祭はこれまで大きく二回の変化をとげてきたとされている(波照間民俗芸能保存会一九八二)。第一回の変化は、おそらく一八世紀後半の天津波以後の時期に、それまで豊年祭アミジワーで行われていた仮装行列をたび重なる東西両組の対立を防ぐために、盆行事に移行したことである。第二回の変化は、戦後における儀礼の短縮、簡素化である。かつては豊年祭は豊年を感謝する四日間のプーリンと、その二〇日後に行われた豊年を祈願する二日間のアミジワーに分けて行われていたが、戦後生活改善のために連続六日間に改められ、さらに一九六九年に四日間に短縮されたという<sup>⑩</sup>。しかし、一九八四年の神行事日程表(表四)によれば六月二三日から六日間となっており、最近はまだ六日間にもどっている<sup>⑪</sup>。豊年祭とはすなわち、六月二三日ミワクチェ(カミミチ神道の掃除)、二四日カンパナ(供物集め)、二五日プーリン(ツカサとパナヌファによる御嶽での行事が中心、各御嶽での巻踊り)、二六日アサヨイ(プーリンの後宴)、二七日アミジワー(プーリンとほとんど同じ行事)、二八日ユーニゲー(島の一般の人が参加する部落単位の民謡や踊り)

である。一九八六年にはアサヨイの日に公民館で二四年ぶりに合同の巻踊りが復活したという(『八重山毎日新聞』一九八六年六月二〇日)。こうした波照間島の豊年祭の儀礼内容を見ると、八重山各地の豊年祭によくみられるミルク、仮装行列、棒術、太鼓、綱引きなどが欠如している点にきわだつた特徴がある。しかし、プーリンやアミジワーで行なわれる部落単位の巻踊りや民謡にあわせた踊りは、ムシャーマほど大規模ではないにしても一応は行われている。現在のムシャーマ行事において、豊年祭に欠けているミルク、仮装行列、棒術、太鼓などが行なわれている事実から、現在のムシャーマ行事はもともとあつたニンブチャーを中心とする無縁先祖に対する行事に加えて、豊年祭の要素が付加された行事であることは間違いないといつてよいであろう。

第三の問題はムシャーマ行事に登場する来訪神の問題である。現在のムシャーマ行事には、ミルク、フサマラー、アングアマの三つの仮面仮装来訪神が登場する。波照間島のミルクは八重山地域のミルクの一般的傾向と同じように布袋の面をつけて登場する。人々に幸福や豊穡をもたらす、人々はミルクを迎えて弥勒節を歌い踊る、などの点も共通している。とくに豊穡をもたらす点が、ムシャーマ行列でミルクにつづく子供たちが五穀の種をもって行列することに象徴されている。波照間島のミルクの特徴として指摘できるのは、ミルク、プーブザー、ミルクンタマがひとつのセットをなして意味づけられ、儀礼化されている点である。つまり、プーブザーはミルクの夫とされるが、ミルクやその子供たちを捨てて家を飛び出した存在として意味づけられ、みすばらしい形やムシャーマ

マ行列のなかであちこちを徘徊したり、妻とされるミルクには近づくことができないなどの所作にこのことが表現されている。こうした意味づけや儀礼的行動は八重山の他の地域のミルクにはない。また、波照間島ではムシャーマにおいて、一生に一度ミルクになることが、男の通過儀礼として重要な意味をもっている。たとえば東組では、老人クラブに入る直前の男性がミルクになるように制度化されている。ムシャーマ行列のさまざまな役割をひとつひとつ果たして行くこと自体が波照間島では通過儀礼の意味をもつが、なかでもこのミルクは特別な意味をもっているといえよう。さらに、波照間島のミルクの特徴として指摘できることは、三つの組によって面、服装、持物に差異が見られることである。

ムシャーマ行列のなかに最近登場するようになった来訪神としてフサマラーがある。フサマラーは波照間島だけにみられる独特の仮面仮装来訪神である。フサマラーは瓢箪をつくった面（かつてはデイゴヤヤシでつくった）を被り、身体中を夕顔やナーベの葉などの蔓で覆い、手にマニ（クロツグ）の長い棒を持った姿で登場し、水溜まりをたたいたりして、とくに女性たちを威嚇してまわる。一九五二年頃までは雨乞い行事（アメニゲ）に登場していたが、その後ときどきムシャーマ行列に登場するようになった。かつてアメニゲに登場していた頃は、フサマラーヤマとよばれる山から出現し、五つの部落の御嶽で行われるツカサを中心とした雨乞い行事に加わった。フサマラーヤマではツカサが一〇本程の竹をたばねたものに水をつけてフサマラーにかけ、雨乞いをした。また、各御嶽に向かうフサマラーが家の近くを通ると、人々は柄杓でき

れいな水をフサマラーにかけたという。こうするとユガフ（幸福や豊穡）がやってくるという。フサマラーは水を掛けられないように走る。また、このとき子供たちは、「フサマラー フサマラー ユーガフ ムチョリヨ、フサマラー フサマラー ユーガフ ムチョリヨ」（フサマラーよ、豊穡を持って来てきてくれ）と口々にはやす。しかし、フサマラーが持つマニの葉でたたかれると命がないともいわれている。フサマラーは各家族を訪問することはない。このアメニゲが終わると二、三日で雨が降ったという。御嶽や井戸をまわり終わるとふたたびフサマラーヤマにもどって面を取り、そこに捨てる。フサマラー面を使うのは一回限りで、翌年はまたあたらしい面をそれぞれが作る。ムシャーマ行列に登場するフサマラーもこうしたイメージをもつ。フサマラーは全体的にきたない姿形であり、人々はこれを恐れるというイメージである。波照間島では、子供たちが外で遊んできた姿で帰ってくると、親は「フサマラーのようだ」といって、早くきれいにするように注意したという。子供たちにとってはフサマラーは恐ろしい存在であったのである。

波照間島のもうひとつの仮面仮装来訪神は、盆のウグリピン（先祖送り）の晩に出現するアンガマである。アンガマは祖先神とされる来訪神で、若者がアンガマ面を被り各家を訪問してニンブチャー（念仏歌）を歌うのが八重山各地で一般的である。祖先神が各家族の先祖を供養する点については不明な部分もあるが、アンガマは八重山の盆行事として広く行われている。八重山の一般的なアンガマと比較して、波照間島のアンガマの特徴としては以下の諸点を指摘できる。第一は、若者ではなく

島の役員たちが行う点である。第二に、訪問する家は波照間島のすべての家ではないことである。波照間島は約二五〇世帯あるから、一晚の打ちにすべてをまわることとはもともと困難であるが、訪問する家は全体の一〇分の一以下である。第三に、アンガマは男性が女装し、仮面をかぶり、裏声を使うという異形を示すことである。

本稿では、一九八四年に行われた波照間島のムシャーマ行事と家族単位の盆行事を記述し、その特徴と意味について考察してきた。これまでに示した考察によって明らかのように、波照間島の盆行事は豊年祭的要素と祖先祭祀的要素の双方を含んでおり、またさまざまな来訪神が登場し、最近の変化も注目される行事である。とくに正当な先祖と無縁の先祖との祭祀的分離は、沖縄や日本本土の盆行事の分析に重要な示唆を含んでいるといえよう。沖縄の他の地域の盆行事の分析が進めば、波照間島の盆行事の特質がさらに明らかになるであろう。

註

- (1) 波照間島のムシャーマ行事については、一九八四年夏と一九八五年夏の二回にわたって観察と聞き調査を行った。このほかに家族や祭祀組織を中心とする調査を一九八六年、一九八七年の二年にわたり実施した。本稿で主にとりあげるのは、一九八四年八月に行われたムシャーマと盆行事である。この夏は八月九日のシキルビン(先祖迎えの日)から、八月一四日まで波照間島に滞在した。波照間島のムシャーマの調査にあたっては、当時波照間公民館長をつとめられていた浦仲浩氏、盆行事を観察させていただいた南部落の勝連文雄氏、勝連スエ氏、および国立歴史民俗博物館の南島展示のためにミルクの面を作成していただいた佐事清祐氏をはじめ波照間島の島の方々には大変お世話になった。ここに記して感謝したいと思う。
- (2) しかしながら、旧暦一月一六日におこなわれるシクルニチ(十六日祭)の墓まわりは神行事の季節に行われる祖先祭祀行事である。

- (3) 仲底善祥はこの間の事情について、「当時の目差職が島の平和を保つ為豊年祭は神行事と巻踊りに止め、豊年祭で行われた弥勒を先頭に行う仮装行列や棒踊、太鼓、獅子舞、舞踊等一切の行事は旧七月一四日世願としてムシャーマの行事をすからよう改正させて大乱争の起因となったカシラ綱引は全廃せたと古シャーマ行事があらたに形成された」と指摘している。一方、本田安次は「このむしやま祭りは、実は盆祭り」と豊年祭りが一つになった形のものであった。百三十四年も前であったろうか、ある年東西の両組(もとは全島は東西の二組に分かれていた)が旗がしら(旗の先につけるかざりもの)のことから大喧嘩をした。東は大陽、西は月の頭であったが、その優劣を論じたことからおこったらしい。そのため、中に入った番所の役人が、翌年からはこれを出すことを禁じた。そしてみるくの行列を豊年祭から切りはなしてむしやまにもつてこさせた。その行列につく旗も、かしらをとったものを立てるようになった。棒や太鼓も、もと豊年祭りのもの、念仏はむろん盆のものだが、獅子は別にあつた盆の獅子を祭りのものとした。舞台の踊りは盆のあそびであろう(本田安次一九六〇、八六頁)と述べて、豊年祭の一部をムシャーマ行事に移したのが、現在のムシャーマであると指摘している。波照間民俗芸能保存会(一九八二)もこの考えを継承していると見られる。ムシャーマ行事がもととあつて、アミジワの行事の一部がこの当時から組込まれたのか、それともこの時にあらたにムシャーマ行事がつくられたのかは、もともとの豊年祭の内容が明らかでないから、判断する資料に不足しているが、ここでは波照間民俗芸能保存会(一九八二)にしたがって、一応前者と判断しておきたい。
- (4) 一三〇〜一五〇年前頃に旗頭をめぐる問題が起きて以来、旗頭は廃止されたままである。もともと東組の旗頭は太陽、西組は月であったが、波照間島で古い部落とされる西組の旗頭が太陽でないのはおかしいという議論がおこり、これをめぐって東西が対立したのが、いわゆる「旗頭問題」である(波照間民俗芸能保存会一九八二)。旗頭は一般にそれぞれの部落のシンボルであり、豊年祭綱引きなどにはよく登場する。
- (5) この点では、西表島祖納の節祭に登場するミルクが、朝から夕方まで祭の日をおしてミルクであり続けるのとは異なっている。祖納のミルクは祭が終わるまで食物も水も口にせず神になりきる。
- (6) 盆が明けた日に村に残った悪霊を祓う行事としてイタシキバラは八重山各地で行なわれている。石垣島宮良ではこれを「イタシキキバラ」といい、集落をまわってニンブチャーにあわせて巻踊りを踊る。獅子舞も行われる。イタシキキバラは先祖が道にさまよう悪霊に負けないようにとの意味で行われる(八重山毎日新聞一九九〇年九月八日)。また、石垣島大浜でも「イタツキバラ」といって老人たちがニンブチャに合わせて巻踊りを踊ったり、獅子舞や棒術も行わ

れる。これは盆に集まった悪霊を集落から払う意味で行われる(『八重山毎日新聞』一九九一年八月二七日)。

(7) 波照間島の共同売店は各部落にひとつずつある。他に個人商店が名石に一軒あるが波照間島の人々の日常的な買物はほとんど共同売店に頼っている。共同売店は部落の各家族が出資して設立されたもので、部落が経営する売店である。部落の主婦が交替で勤務にあたり、朝と夕方のみ営業している。共同売店については、安仁屋政昭・堂前亮平(一九八二)参照。

(8) この点では、同じ南島でも奄美(とくに北部)のように、墓を家々の近くに作り、毎月一日、一五日に墓参りを繰り返す地域と異なっている。これは祖先にたいする観念の差異を示しているといえよう。

(9) 正当な先祖の祭祀と無縁の先祖の祭祀を分離するかどうかという視点に立てば、日本の祖先祭祀形態はつぎの三つの形態に区分されると思われる。第一は、奄美のように両者を家族レベルで統合しながら行う型である。この型では無縁先祖の供養のための益棚をどこにどう作るかが注目される。第二は、波照間島のように両者を村レベルと家族レベルに分離する型である。第三は、無縁先祖の祭祀をとくに行わず、各家族の正当な先祖の祭祀として盆行事を行う型である。全体としては第一、第三の型の盆行事が多いように思われるが、今後の検討に待ちたい。

(10) 短縮・簡素化以前の豊年祭については宮良高弘(一九七二)に詳述されている。  
 (11) 『八重山毎日新聞』(一九八八年六月八日)によれば、一九八八年の豊年祭も六日間の日程で行われている。三年前に復活したアサヨイの日の合同の巻踊りはすっかり定着している。

〈参考文献〉

安仁屋政昭・堂前亮平(一九八二)『波照間島・石垣島・西表島の共同店と村落構造』『波照間島調査報告書』(地域研究シリーズ3)、六七―七五頁、沖縄国際大学南島文化研究所。

島山 篤(一九八二)『波照間島の豊年祭と祈年祭』『波照間島調査報告書』(地域研究シリーズ3)、一九―三九頁、沖縄国際大学南島文化研究所。

波照間民俗芸能保存会(一九八二)『波照間島のムシヤーマー南島の豊年祈願と祖先供養の祭典』、波照間民俗芸能保存会。

本田 安次(一九六〇)『沖縄の芸能』『世界の旅・日本の旅』八三―八九頁  
 本田 安次(一九六二)『南島探訪記』

加屋本正(一九七七)『波照間島』(自費出版)  
 馬淵 東(一九六五)『波照間島その他の氏子組織』『日本民俗学会報』四〇、一一―一頁

宮良 高弘(一九七二)『波照間島民俗誌』、木耳社

宮田 登(一九七二)『沖縄のミルク神』『民族学研究』三六巻三号、二五三―二五九頁

仲底 善祥(一九七九)『波照間島の民俗芸能―ムシヤーマーを中心として―』、沖縄県教育委員会編『八重山の民俗芸能』(沖縄県文化財調査報告書二〇)、九一―四頁  
 小野 重朗(一九八四)『正月と盆』『日本民俗文化大系』九、一二七―一八八頁  
 折口 信夫(一九五五)『年中行事―民間行事伝承の研究―』『折口信夫全集』一五、四七―一四頁(原論文発表は一九三〇―一九三二年)。  
 アウエハント、C。(一九六七)『波照間島の神行事について』『沖縄文化』三三、二五―四〇頁

Ouweland, C. (1967) "The Ritual Invocations of Hateruma" in *Asian Folklore Studies* 26(2):63-109

Ouweland, C. (1985) *HATERUMA: Socio-Religious Aspects of a South-Ryukyuan Island Culture*, Leiden: A. J. Brill

酒井 卯作(一九六四)『波照間島調査報告―沖繩八重山群島―』『日本民俗学』二巻二号、四三―六一頁

住谷 一彦・クライナー、J。(一九七七)『パティローマーモノグラフによる日本民族文化複合へのアプローチ―』『南西諸島の神観念』二、三三―三二頁

田中 宣一(一九八四)『年中行事の構造』『日本民俗文化大系』九、六七―二六頁  
 上野 和男(一九八二)『祭りと社会構造―奄美管轄の豊年祭を中心に―』『歴史公論』七巻八号、九三―九九頁

上野 和男(一九八四)『奄美と沖縄―南島民俗の多様性―』『歴博』八、四―五頁  
 上野 和男(一九八五)『南島の世界』『月刊文化財』二五八、三〇―三三頁

上野 和男(一九八六)『古宇利島海神祭の時間論』、坪井洋文編『日本人の民俗的時間認識に関する総合的研究』、二九―三三頁

上野 和男(一九八八)『博物館の原点』『歴博』二四、一頁

上野 和男(一九八八)『波照間島の家族組織と祖先祭祀』『南西諸島の家族の伝統と変容に関する調査研究』、一―一五頁

上野 和男(一九九二)『ナマハゲ・トシドン・アカマタクロマター日本の仮面仮装来訪神とその地域性―』、大林太良編『日本人とその文化の地域性』、一六―二二頁

上野 和男(一九九二)『波照間島の仮面仮装来訪神』『歴博』四九、一〇―一一頁  
 上野 和男(一九九五)『年中行事の調査方法』『伊那民俗研究』五、九―二四頁

## Ancestor Worship and Farming Rituals of Hateruma Island, Okinawa

UENO Kazuo

This paper gives an analytical description of the Bon rituals observed on the Hateruma island, Yaeyama, Okinawa. There are two types of the observance, one held at the village level centering around the Mushāma, and the other on a family basis. The Mushāma festival consists of a masquerade parade led by the visiting god Miruku, the *bōjutsu* fencing, drum music, lion dancing, and the *ninbuchā* (*nembutsu* dancing). The village-level observance also includes a rite dedicated to the visiting god Angama and another rite called Itashikibara. The family-level Bon observances are structurally common throughout the country, consisting of welcoming the souls of the ancestors, enteraining them with food and other offerings, and sending them off on their return to the world of the spirits.

This paper studies the Bon festivals observed on Hateruma Island, focusing on three points: first, the procedures of both the village and family observances, their differences, and their relationships; second, the ancestor worship and farming-rite (especially harvest festival) aspects of the Mushāma ritual; and, third, the three visiting gods Miruku, Fusamarā and Angama.

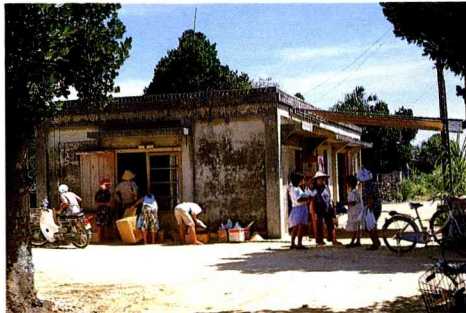
The examination of these leads to the following conclusions. First, Hateruma's village and family Bon rituals differ in meaning, for the former is dedicated mainly to unrelated (*muen*) ancestors and the latter to each family's orthodox ancestors. Second, village ritual, containing both the elements of harvest and ancestral festivals, resulted from the harvest festival Amijiwā having moved into the original ancestral rite Mushāma festival. Third, Hateruma's rites for the gods Miruku, Fusamarā, and Angama have several features distinctive from many other visiting-god festivals in the Yaeyama area.



(1) 波照間島の家屋。波照間島の集落は台風を防ぐために家屋の周囲にはフクギなど風に強い木々で囲まれている。家屋の周囲にはサングの塀があり、門口を入るとこの写真にもあるように、ヒンプンがある。また、波照間島は水がしばしば不足するので、天水を溜めるタンクが各家に備えつけられている。



(2) 1年間の神行事の日程はバンユレーとよばれる行事で決定するとガリ版で印刷され各家庭に配布され、目につくところに張り出される。これは南部落の共同売店に掲示された1984年の神行事日程表。



(3) 北部落の共同売店。波照間島には個人商店が少ないので、日常的な買物は共同売店で行われる。波照間島の5つの部落すべてに共同売店がある。共同売店は部落の各家族が出資した資金により経営されているもので、主婦が交替で勤務する。1984年は盆の先祖迎えの日によろやく石垣島からの定期船が到着したので、買物の村人でにぎわっている。



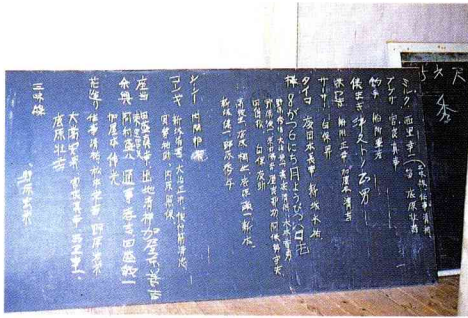
(4) 東組のミルクの面と道具。面はダイゴの木でできており、これは100年以上前に作られたといわれている。面は古いが、毎年ムシャーマが近づくと塗り替える。扇の表には太陽、裏には月が描かれている。



(5) 獅子の面は各組に2つずつある。ミルクとおなじように組によって多少の違いがある。これは東組の獅子舞の頭で、ダイゴでつくられている。1964年に新しくつくられたという。東組には古い獅子頭も残されている。



(6) 獅子舞は獅子と獅子囃子によって行われるが、これは東組の獅子囃子がつける鬼の面。獅子囃子の面があるのは東組だけである。ムシャーマの行列の中でも獅子囃子は面を被り、長い棒で獅子をあやしなから行進する。



(7) 南部落の会館の黒板にかかれたムシャーマ行列の役割分担。役割分担は8月3日に行われたナンガーソリン（7日盆）の時に決定される。ミルク、釣り手、棒、太鼓、三味線などの役割分担と名前が書かれている。



(8) 8月10日ムシャーマ行列が行われる午前8時、ミルクとその夫とされるブーブザー役をつとめる男がシマの東のはずれのガジュマルの下でミルクの面、衣装と供物を供え、アガリ（東）の方向に向かって祈る。右がミルク役、左がブーブザー役である。ミルク役は老人クラブに入る直前の男性がつとめることになっている。



(9) このとき供えられる供物は、泡盛と砂糖天ぷら、蒲鉾、玉子焼きなどである。東の方向に向かって祈ったあと、ミルク役、ブーブザー役は酒を一杯口につける。



(10) そのあとミルク役はさっそくミルクの衣装をつける。東組のミルクは真新しい下着の上に黄地の着物に格子縞の帯をつける。頭は唐草模様の風呂敷（かつてはあでやかな紅型の染物であった）をかぶり、面をかぶる。



(11) 午前9時、東組からいよいよムシャーマの行列が開始される。東組のムシャーマ行列の先頭は「東」の文字と太陽をあしらった旗である。旗には旗頭がない。そのつぎのは「祈豊年」と書かれた紙の幟がつづき、そのうしろにミルクがつく。ミルクの後ろにはミルクンタマーとよばれる日の丸の旗をもった子供がつづく。



(12) 東組のムシャーマ行列の先頭に行くミルク。右手に扇を持ち、左手には長い棒をもって、扇をゆったりと振りながら歩を進める。身体を左右にゆったりと振りながら行進するが、一回転はしない。ミルクの右側にはスクテンとよばれるミルクの椅子をもつ子供がいる。





(13) ミルクのすぐうしろには、稲、粟、麦、きび、豆の五穀の種をかごにいれて手に持ったカンゴタマとよばれる2人の子供がつづく。頭には紅白の鉢巻きのようなものを巻き、腰にも赤い帯を巻いている。五穀の種はこの行列の豊年祭的要素の象徴のひとつである。



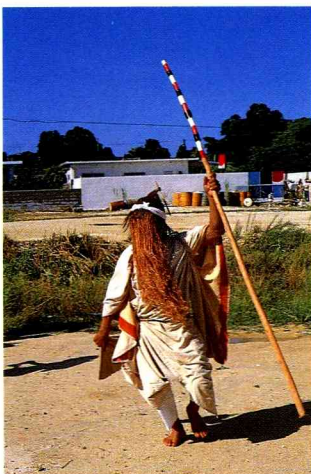
(14) ミルクスジー（弥勒節）を歌う女性の一団。ミルクは女性とイメージされ、ミルクにつづく子供たちはミルクの子供とされる。そしてそのあとに、ミルクを囲むとされる女性たちがつづくのである。



(15) マミドーマとよばれる子供を中心とした一団。マミドーマも農耕儀礼的要素を象徴する出し物のひとつで、手に手にもっているのは、鎌、鍬、へらなどで、行列の最中のこれらをつかって農作業の所作をくりかえす。



(16) 稲摺節を歌う女性の一団。白い布を2人の女性で持って、それを引きながら稲摺りの所作をしたり、箕を上下に振りながら、稲殻を飛ばす所作などをする。行列のなかではもっともよく農耕儀礼を表現している。右側の女性は鼻にかざりをつけており、道化的な要素もある。



(17) ブーブザー。ブーブザーはミルクや子供たちを捨てて家を飛びだしたという設定で、醜いイメージである。クバの皮でつくった被りもの、顔全体を覆っている長い髭、腰のタバコ入れが特徴である。ブーブザーは行列の後半をあちこち徘徊しながら行進する。ミルクに近づいてはいけないとされている。前組、西組にもブーブザーが登場する。



(18) 崎枝節を歌いながら行進する馬ブシャーは、馬をかたどった木の型をからだの前につけ、馬に乗って手綱を引く所作をしながら行進する。中学生とおもわれる子供たちが担当する。



(19) ムシャーマの行列のなかには、さまざまな民謡を歌いながら行進するグループがいくつかある。組によって歌われる民謡には若干の差異がみられるが、これは東組の六調節か鳩間節を歌いながら行進する女性の一団。



(20) 東組だけの出し物であるハリエー。ハリエーは子供たちが、鎌、鍬、へらなどの農機具をもって行進する。マミドーマと同じように農作業を表現している。



(21) 頬被りをして腰には赤いふんどしのようなものを巻いた女性の一団で、海のナンボラとよばれる。ユーモラスな所作を繰り返して、行列をみる観衆を沸かせる。行列の中ではもっとも道徳的要素をもつ一団である。



(22) 紺の法被、唐草模様の被りもの、赤い脚半のようなものをつけた高校生以上の男子で構成される棒術の一団。子供から若者に成長すると棒術を経験する。したがって棒術を行うのは若者になったシンボルでもある。



(23) 魚釣り。長い竿を持ち、糸の先にはカツオの模型がつけられている。波照間島でかつてさかんに行なわれたカツオ漁の所作を行う。あちこちの水たまりに魚を入れて、それを釣る所作をくりかえす。行列の中では唯一の漁撈的要素である。



(24) テーク（太鼓）。棒術よりもやや若い子供が担当する。子供たちは棒術と同じように、頭には被りものを被り、脚半のようなものをつけている。太鼓は各組4つで、大人の笛が4人ついて行進する。



(25) 東組のムシャーマ行列の最後は獅子と獅子囃子である。波照間島の獅子はどの組も2体で、それぞれに囃子がつく。東組の囃子は鬼の面をつけて獅子を囃す。他の組には獅子囃子の面はない。獅子舞を舞いながら行進する。



(26) ミルクは右手の扇を持ち、左手に長い棒を持って行進するのは各組とも共通であるが、面や衣装が少しずつ異なる。これは前組のミルク。東組のミルクにくらべて額や頬が大きく、目も切れ長になっている。面は1976年に製作されたものでもっとも新しい。衣装の黄色はやや薄く、帯をつけない。



(27) 西組のミルク。波照間島の3つのミルクのなかでは最も丸顔である。ミルクの前にはナリとよばれる飾り物をもった子供がいる。ナリは竹に五穀の実をあしらってつけたもので、これもまた農耕を象徴する出し物である。



(28) ムシャーマの行列のなかに登場する雨の主とされる来訪神フサマラー。1984年のムシャーマ行列では、前組に6体のフサマラーが出た。このうち2体は女性が面を被っていた。水を入れた甕をリヤカーに乗せて引いている。



(29) フサマラーは手にもったマニ（クロツグ）の枝をふりまわし、水たまりをこれでたたいて晴着の女性たちをおどかしながら行進する。観衆は「フサマラーにさわると命がない」といわれているので逃げまどう。



(30) フサマラーの面は現在では瓢箪を半分に分けて、これに貝の眼や歯をつけてつくる。かつてはデイゴやヤシでつくったという。身体は夕顔やナーベの葉で全体を覆う。全体的にきたないイメージでつくられている。



(31) フサマラーの面はこれを被る者が毎年新しくつくるので、瓢箪の大きさも少しづつ違う。頭の上にはチョンマゲのようなものもつくられている。使い終われば捨ててしまう。現在、国立歴史民俗博物館の第4展示室で展示しているのは、この年の前組のフサマラー一面である。



(32) 午前10時にはすべての行列がオーシャ（波照間公民館）に到着し、オーシャで棒術、太鼓などが行われる。ミルクはオーシャに到着すると面も衣装も脱いでしまう。帰りの行列でまたミルク面をつけ衣装をつけるので、それまではオーシャの内部に置いておく。行事の途中で面を取ってしまうのは波照間島のミルクの特徴である。



(33) 面と衣装をとって中庭の特別の席にすわる3人のミルク役。プープザーはここには着席しない。ミルク役の前には来賓と同じように、酒と弁当が出されている。この間、ミルク役は人間にもどっていることになる。



(34) オーシャの前で行われる棒術。オーシャでの出し物は行列の順序と同じように、この年は東組、前組、西組の順序で行われる。棒術は各組10人ずつで、2人1組になってつぎつぎに演じられる。なかには本物の刃物を棒の先につけて演じる組もあった。



(35) 棒術につづいてテーク（太鼓）が行われる。太鼓は太鼓4人、太鼓持ち4人、囃し4人、笛4人の構成で、全部で16人である。



(36) オーシャでの午前中の最後は、ニンブチャー（念仏踊り）である。ニンブチャーは無縁の先祖の供養のために行われるもので、もの悲しい調べが特徴である。ニンブチャーは各組別ではなく合同で行われる。棒術や太鼓の若者が中庭に円を描きながらまわる。中央には酒、料理などの供物が供えられる。



(37) オーシャの舞台正面のやや高いところに作られた招待者の席。竹富町の関係者や近隣の島の代表者、村の長老などが招待される。この席にすわる人々はネクタイを締めて正装している。招待者には酒と弁当が用意される。



(38) ニンブチャーを最後に午前の部は終り、人々はいったん家にもどる。午後は1時半から民謡や踊り、狂言などが行われる。これは午後の出し物が行われている時の会場風景。石垣の上の招待者の手前には、一般の大人がすわる。この人々には食事が用意されないで、家から酒と料理を持参する。



(39) 舞台からやや離れたところから舞台をみる女性と子供たち。オーシャ周辺での席では、一般の村の人は男女別々に席を取る。家族単位に席はとらない。女性と子供たちは木々の間にビニールのシートを敷いて座る。やはり家から飲み物や食べ物を持参する。



(40) 午後の部の出し物は民謡や踊りのほかに狂言やコムッサーとよばれる踊りが演じられる。これは一番狂言で、出し物のなかでは最も観衆の笑いを誘った。午後の出し物も東組、前組、西組の順序で行われる。



(41) おもに女性たちによって歌われ踊られる民謡。これは波照間節の踊りである。組によって出し物は異なるが、かぎやで風節だけはどの組でも演じられる。各組1時間ずつ演じ、午後5時にはすべての出し物が終了した。



(42) 民謡と踊りが終了すると舞台はかたづけられ、そのあとに獅子の棒（シシンボー）と獅子舞が演じられる。これは獅子の棒。4人が1組となり、獅子をあやす棒をつかって演じられる。



(43) 最後に行われる獅子舞。各組2組ずつの獅子が中庭いっぱいには暴れまわるのは圧巻である。公民館長など村の人々は獅子をあやして興奮させる。獅子舞が終われば、オーシャでのムシャーマの行事はすべて終了する。



(44) 帰りの行列は午後5時半頃にオーシャを出発し、30分ほどで各組の会館に帰る。これはオーシャを出る東組の行列。朝の行列に比べると、人数もやや少なく、途中の演技も簡単である。



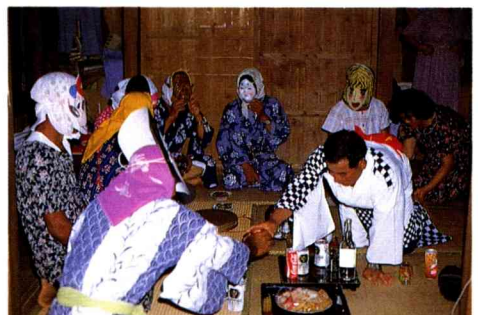
(45) 各組の会館に帰ると、それぞれでまたニンブチャーが行われる。これは前組の会館の庭で行われたニンブチャー。オーシャでのニンブチャーと同じように若者と笛を中心に行われる。前組ではニンブチャーは30分以上続けた。



(46) 8月11日のウグリピンの夜に行われたアンガマ行事。午後8時、波照間公民館の役員など10数人はオーシャに集合して、軽トラックで最初に訪問する外部落に向かう。外、名石、前、南、北の順にすべての部落をまわる。ただし訪問するのは、おもだった10数軒のみである。



(47) アンガマを行うのはすべて男であるが、女性の着物を着て、頬被りをし、それぞれがつくった紙などの面をつける。巾着をもつアンガマもいる。話をする時はすべて裏声を使う。男性であることがわからないようにする。これはドラを鳴らしながら、訪問する家へと向かうアンガマたち。



(48) アンガマの一行は訪問する家に入ると、まずその家の世帯主からもてなしを受ける。酒と料理が出される。各家で過ごす時間は平均15分程度であるが、こうしてもてなしを受け、酒を吞んでいる時間がかかり長い。



(49) もてなしが終わると代表者がその家の二番座の先祖棚にむかって拝む。祖先神の来訪神であるアンガマがその家の先祖に挨拶をする。したがって、アンガマは個別の家々の先祖とは考えられていないことになる。



(50) 先祖への挨拶が終わると、ドラの音にあわせてニンブチャーが歌われる。ニンブチャーは5分間程度で終わる。アンガマがつけている面は手製のもののほか、買って来たとおもわれるセルロイド製のものもある。木製のアンガマ面はひとつのみである。



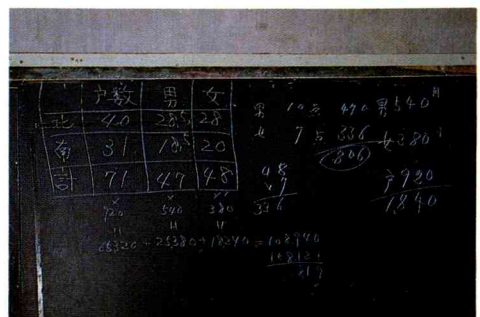
(51) アンガマが訪問する家には近所の人たちが大勢見物に来る。とくに子供たちが多い。子供たちは縁側から、裏声を出すアンガマをからかったりするが、ニンブチャーを終わってアンガマが縁側から出てくると逃げるように去って行く。



(52) アンガマの翌日の8月12日にはイタシキバラが行われた。これは南部落の会館の庭で行われた老人を中心とした宴。参加者は酒と料理を家から持ち寄る。酒を呑んだり、歌を歌ったり、ニンブチャーをやる。



(53) イタシキバラでは溝さらいなどの共同作業も行われるが、この日は雨で中止になった。しかし、部落の役員は会館にあつまってムシャーマのあとかたづけをする。獅子、棒、太鼓、ミルクの面や道具などをかたづけるとともに、ムシャーマの費用の決算も行われる。



(54) 南部落の黒板で計算された決算の方式。この年、東組は約11万の費用がかかった。これを戸数割と男女の人数割で各戸から徴収する計算がかかっている。男女差はあるが、基本的には各戸が大人の人数に応じて実質的に対等になるように計算されている。



(55) ある役員の家では、女性たちが集まっておもに衣装のあとかたづけが行われていた。必要なものは洗濯しアイロンをかけ、畳んで箱に収納する。これらのあとかたづけには1日かかる。



(56) 6時すぎになると、老人（男女）によってムラザレが行われた。ムラザレは盆をすぎても村に残った悪霊を追い払う行事で、10数人の老人がドラをならし、太鼓をたたきながら部落中をまわる。他の部落との境では一斉の片足をあげて、悪霊をほかの村に追い出す所作をする。



(57) 午後8時すぎになるとイタシキバラの最後の行事である獅子舞が会館の庭で行われる。獅子舞もまた悪霊を追い払う意味をもつ。このとき子供たちや大人が会館の中庭に集まって、にぎやかに獅子舞が行われる。このとき獅子舞をやるのは老人である。



(58) ムシャーマに平行して家族単位の盆行事も行われる。まず、8月13日のシキルビンの日には先祖迎えの前に先祖棚の供物の準備が行われる。これは南部落のある家族で世帯主がサトウキビを束ねて飾り物をつくっているところ。



(59) 先祖棚にはさまざまなものが供えられる。生花、果物、サトウキビ、餅、ダンゴ、花米、酒、茶、砂糖菓子などである。供物が供えられると先祖棚は一挙にはなやかになる。この家族の位牌は朱塗りの中国風の位牌であるが、これは普段の位置のままである。



(60) 先祖棚の準備がすむと、午後に墓参りをして先祖を迎える。波照間島の墓は集落の外側にあり、遠い家は軽トラックで墓参りに行く。墓はジルクニチ（1月16日）以後、参っていないので草に覆われていた。掃除のあと、酒、茶、菓子を供え線香を焚いてまいる。





(61) 波照間島の墓は家族単位につくられる。その形態にはおよそ3つある。これはもっとも古いと思われるサンゴの石でできた墓。四方をサンゴの石で積み上げ、中央に大きな石で蓋をする。前面には60センチ四方程度の入り口を設ける。



(62) これは亀の甲羅の形をした亀甲墓。サンゴの墓について古いと考えられる。



(63) これは家型の墓の上に石塔を立てた墓。この型の墓が最近ではふえている。石塔は本土の影響と考えられる。石塔には「〇〇家之墓」のように家の名前が書かれているものが多い。



(64) 墓参りをすませて先祖を家に招いたあとに、さっそく先祖棚に供物が供られる。この家族の場合には2人分の酒と膳が供えられた。膳には雑炊、吸い物、新香、カツオの刺身、蒲鉾・天ぷら・からあげの盛物であった。先祖を迎えた日にはカツオの刺身を供えるのが昔からのやりかたである。先祖が食べやすいように、先祖棚の方に箸が置かれている。



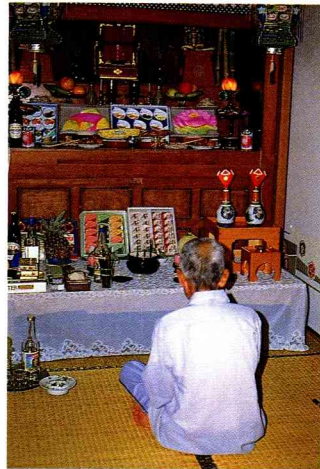
(65) 供物を供えたあと、世帯主が先祖を迎えてはじめて先祖棚におまいりする。このあと家族もおまいりする。



(66) 盆の中日（ナカヌビ）のムシャーマの日の昼の供物。お茶と果物が供えられている。盆の期間中、先祖に何度も供物が供えられる。



(67) ウグリピン（先祖送り）の朝の供物。このときには酒、御飯、吸い物、新香、生卵が供えられた。このとき供えられたのも2人分である。ウグリピンの日には、かつては男が先祖に供える魚を取りに行ったが、現在は行われていない。



(68) 盆の期間中、親族の先祖棚まいりが行われる。



(69) アンガマ行事がおわって、午前1時ころから先祖送りが行われる。これは先祖送りにあたって、先祖に最後にそなえられた供物。酒、茶、菓子、蒲鉾・天ぷらなど、吸い物が供えられる。この時は料理ごとに盆に入れられていた。



(70) 供物を供え終わると、家族全員が先祖棚の前に集まっておまいりし、先祖と別れをつける。このとき世帯主が声をあげて供物の内容を先祖に説明する。おまいりが終わると、タチブシンの酒を世帯主、妻、子供の順に家族全員で呑む。



(71) つぎに世帯主と妻が、先祖棚の前に水を入れたたらいを用意して、ウチカビを燃やす。ウチカビは貨幣の型をつけた黄色い紙で、これを3セント分燃やすのだという。中国的な習俗である。



(72) ウチカビを燃やし終わると、先祖棚の供物をすべて下ろし、金たらいにいれて、家の門口まで運ぶ。ここで世帯主が線香をあげて先祖を送る。これで盆の行事はすべて終了する。